

弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

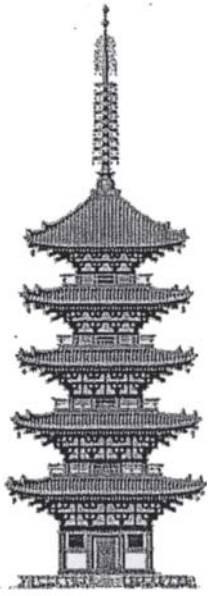
☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

皆さん、こんにちわ。お盆もすぎましたが、まだまだ暑い日が続きます。くれぐれもご自愛ください。弘法大師の生涯をお伝えしている今年のかわら版。今月は**入定(にゅうじょう)**後の空海です。

★ 五筆(ごひつ)和尚

承和三年(八三六年)、空海入定の翌年、後継者である**実慧(じちえ)**が、空海の恩師である**惠果(けいか)**和尚の墓前と**青龍寺**の人々に空海入定を報告するために弟子二人を唐に派遣。しかし、船は対馬に漂着して入唐できませんでした。**承和四年(八三七年)**、再度弟子が派遣され、ようやく空海入定が惠果和尚の墓前に報告されました。**仁寿三年(八五三年)**、空海の甥にあたる天台宗の**円珍(えんちん)**が入唐した際、惠灌



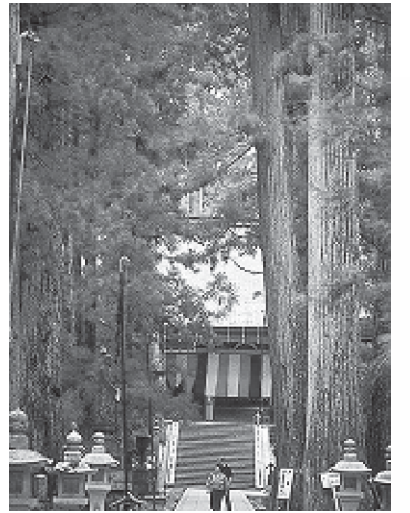
(**えかん**)という老僧から「**五筆和尚**はお元氣ですか」と尋ねられました。

五筆和尚は空海のことだと気づいた円珍が「お亡くなりになりました」と伝えると、老僧は号泣。円珍は他の僧からも何度も空海がいかに卓越した僧、名書家であったかを聞かされました。空海の唐滞在は**わずか一年**だけ。**半世紀**も経ってこのように思われることから、空海が唐の人々にいかに強烈な印象を与え、かつ敬愛されていたかが分かります。

★ 醍醐天皇と弘法大師

空海入定後、**高野山**は**真然(しんぜん)**、**東寺**は**実慧(じちえ)**、**神護寺**は**真澄(しんせい)**と、高弟がそれぞれ引き継いでいきました。

入定後も空海の名声はさらに高まります。**天安元年(八五七年)**、**文徳天皇**が空海に**大僧正**の官位を追贈。**貞観六年(八六四年)**、今度は**清和天皇**が空海の徳を讃えて**法印大和尚位**を追贈。そして、**延喜二十一年(九二一年)**、**醍醐天皇**が弘法大師の



高野山奥の院

諡号(しごう)を追贈。時の東寺長者(管長)の**観賢(かんげん)**僧正は、天皇から下賜された御法衣を持って高野山に上り、**奥の院御廟**を開扉。空海の法衣を改めました。

大師号は、功徳のあった高僧に対して朝廷(天皇)から送られる諡号(しごう)。**おくりな**僧が大師号を贈られています。

★ 御影供(みえく)法要

都に戻った観賢僧正は、東寺**灌頂院(かんじょういん)**において、毎月二十一日の空海の月命日に法要を行う**御影供**を定例化。

こうして、入定信仰、弘法大師号、御影供という、**弘法大師信仰の三要素**が確立しました。平安時代は**延暦十三年(七九四年)**に**桓武天皇**が平安京(京都)に都を移してから、**源頼朝**が征夷大將軍に任命されて鎌倉幕府が確立する**建久三年(一一九二年)**頃までの約四百年間を指します。



東寺の立体曼荼羅(羯磨曼荼羅=かつま・まんだら) 空海の指導のもと、仁王経曼荼羅を二十一体の仏像を配置することで表現しています

平安時代末期には弘法大師信仰、東寺信仰が篤くなり、**南大門前**に**一服一銭**という茶屋が開かれました。御影供法要の毎月二十一日に大勢の人で賑わう「**弘法さん**」の縁日も、その頃に始まったようです。東寺には、往年の空海が十年の歳月を費やして完成させた**講堂**があります。**大日如来**を中心にした**立体曼荼羅**は、空海が唐で感得した密教世界が表現されています。

★ 空海の十卷章

来月は空海がその生涯の中で書き上げた著作をご紹介します。その中の中心的な著作を空海の**十卷章(じっかんじょう)**と言います。乞う、ご期待。